



Title	近現代の沖縄における茶業史と茶文化
Author(s)	宮嶋, 純子
Citation	周縁の文化交渉学シリーズ1 『東アジアの茶飲文化と茶業』 : 119-128
Issue Date	2011-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/4398
Rights	
Type	Article
Textversion	

近現代の沖縄における茶業史と茶文化

——沖縄茶文化調査報告——

宮 嶋 純 子

A Survey of the Tea Industry and Tea Culture in Modern Okinawa

MIYAJIMA Junko

本稿は、2009年7月28日（火）から8月5日（水）にかけておこなった「沖縄における茶文化調査」に基づく、近現代の沖縄における茶業史と茶文化に関する報告である。近現代の沖縄における茶樹栽培の歴史は、紆余曲折を経ながらも定着と発展がはかられてきた。その努力と工夫は現在に至るまで、形を変えながら受け継がれている。一方、消費という面から見れば、さんぴん茶に代表されるように、沖縄における飲茶の主役は常に中国・台湾・日本という周辺諸地域からの輸入茶であったといえる。このような茶文化の発展と展開と可能にしたのは、沖縄が周囲の情勢に応じて様々な地域から茶を輸入することのできる「周縁」であり、その周縁性が保持され続けてきたからにほかならない。

キーワード：沖縄茶業，茶文化，さんぴん茶，清明茶，周縁地域

はじめに

本稿は、2009年7月28日（火）から8月5日（水）にかけておこなった「沖縄における茶文化調査」に基づく、近現代の沖縄における茶業史とその現況に関する報告である。

当調査は、関西大学文化交渉学教育研究拠点（ICIS）において若手研究者による共同研究「東アジア文化比較から考えた茶をめぐる文化的脈絡」の一部として2008年11月に行われた調査を引き継いで実施されたものであり、前回同様ICIS-PDの岡本弘道氏、同RAの大槻暢子氏と宮嶋が参加した。調査の目的は主として2008年11月における沖縄調査報告書¹⁾の作成時に3人が個々に執筆を担当したテーマ（岡本氏：王国期の琉球の茶文化，大槻氏：ブクブク茶と振茶，宮嶋：近現代の琉球＝沖縄の茶文化）につ

1) 前回の調査概要については、大槻暢子・岡本弘道・宮嶋純子「沖縄における茶文化調査の概要と今後の課題」（『東アジア文化交渉研究』第2号，2009年3月，289頁～311頁）において報告をおこなっており、筆者は三章3節「近現代の琉球＝沖縄の茶文化について」（304頁～309頁）を執筆した。以下、適宜この報告を参照する。

いての補完・深化をはかることである。以下に、調査日程の概要をあげておく。

2009年7月28日（火）

- ・那覇着，県産茶・日本茶・中国台湾茶及び健康茶・ブクブク茶セット等の製造販売を手がける，株式会社比嘉製茶（中頭郡）を訪問。
- ・琉球大学付属図書館にて関係資料を閲覧。

7月29日（水）

- ・久米島へ移動，久米島自然文化センターにて，製茶に関する上江洲家文書を閲覧。
- ・上江洲家にて伝来の茶壺を実見。

7月30日（木）

- ・那覇へ移動，NPO法人「琉球の茶道ぶくぶく茶あけしの会」（浦添市）会長の田中千恵子氏を訪問。

7月31日（金）

- ・沖縄で紅茶栽培を手がける，沖縄紅茶農園（うるま市石川）を訪問，茶園を見学。

8月1日（土）

- ・那覇市以南にて，ブクブク茶を提供する喫茶店を数件訪問。なおこの日以外にも，空き時間を利用してブクブク茶を提供する喫茶店を何件か訪問した。

8月2日（日）

- ・名護市へ移動，途中沖縄における茶栽培発祥の地として知られる，漢那地区（宜野座村）に立ち寄る。

8月3日（月）

- ・奥共同店（国頭郡）を訪問，糸満盛也氏の案内で奥の製茶工場・茶園を見学。

8月4日（火）

- ・金川製茶（名護市）を訪問。製茶工場・茶園を見学。
- ・沖縄農業試験場名護支部（名護市）・果樹茶業研究室の平松紀士氏を訪問。

8月5日（水）

- ・大阪帰着。

一 調査の課題と目的

先述のように，筆者は2008年11月時の沖縄調査の報告書においては「近現代の琉球＝沖縄の茶文化」をテーマとして分担箇所を執筆した。そこで最初に，初回調査時の着目点と成果・課題を簡単にまとめておきたい。

一口に茶文化といっても様々な側面があるが，前回の調査においては，茶文化成立の最も中心をなすであろう，近現代の琉球＝沖縄における茶の消費・流通・生産の歴史と現状把握に力点をおいて聞き取り調査を実施した。その主な対象としたのは，那覇市周辺の小売の茶舗である。ために那覇周辺における茶葉消費・流通の実態に関してはある程度明らかにし得たし，また近代以降の茶文化史についても概

略を掴むことができた。

しかし同時に、様々な課題とさらなる調査の必要性もまた明らかとなり、今回再び現地調査をおこなうこととなったのである。先の報告で今後の課題としてあげたのは、まず茶葉の消費・流通の実態把握の面では、調査範囲が日程の関係上那覇周辺にとどまっておき、本島中部以北については調査の余地が多く残っていること、小売の茶舗のみならず卸売業者にも聞き取りを実施し、輸入茶の現状についてより詳細な情報を得る必要があること、また前回調査時には手つかずだった県内茶の生産実態についての調査、あるいは茶文化史に関する種々の資料をさらに蒐集すること等であった。

そこで今回は、近現代の沖縄における茶の消費・流通・生産の歴史と現状をより具体的かつ詳細に把握するため、これらの情報が不足していた分野の補完を目的とする調査をおこなった。中でも沖縄における茶の生産実態について現在製茶にたずさわる関係者を訪問することに重点をおき、実際に県内の各地域を訪ね多くの方からご教示をいただくことができた。本報告では、前後2回の調査と幾つかの資料を踏まえて把握し得た、近現代の沖縄における茶業史の概要と現況を、二章に分けて以下に述べる。

二 近現代における沖縄茶業史の概要

1 琉球＝沖縄の「周縁」性と茶文化

「沖縄における茶文化調査」を実施するにあたって、当初より参加者間に共通して強く意識されていたのは、日本と中国の双方の影響を受けつつ琉球＝沖縄の茶文化が遂げた、独自の展開であった。それはすなわち、琉球＝沖縄が中国と日本の双方の「周縁」であるという条件と密接に関連している。そのような条件下のもと展開し成立した琉球＝沖縄の文化的伝統が、文字通り伝統として現在もなおかれらの生活文化を規定し続けているのではないか、という推測がこの調査を実施する動機であったといえる²⁾。

琉球＝沖縄の茶文化の独自性を本稿のテーマに則して具体的に言えば、歴史的に域内での茶の生産が紆余曲折を経たにしろ継続して行われてきたのに対して、域内で消費されるのは輸入品の中国茶、或いは台湾茶や日本茶が常に多数を占めており、域内における茶葉の生産と需要がうまく噛み合っていないことがあげられる。このことは茶の生産者にとってはもちろん、為政者にとっても深刻な問題であった。亜熱帯という気候上茶の消費量が他の地域よりもかなり多いのに、それを外部からの輸入でまかなえば輸入額が莫大なものになるからである。そこで茶の自給率をあげるべく、様々な茶業の振興策がとられることとなった。近現代における沖縄の茶業史は、常にこの自給率の問題を抱えていたのである。

本章では、近現代の沖縄茶業史の概略を述べる。特に、上述のような問題意識を踏まえて、琉球＝沖縄の域内における茶葉の生産と消費傾向との対比を中心に取り上げたい。以下、特に注記しない限り、沖縄茶生産協議会編『沖縄茶業誌』（1995年11月刊行）の記述に依拠するものとする³⁾。

2) 大槻・岡本・宮嶋前掲論文、289-290頁参照。

3) 『沖縄茶業誌』の参照にあたっては、沖縄農業試験場名護支部・果樹茶業研究室の平松紀士氏の御高配を頂きました。記して深く感謝の意を表します。

2 明治以前

琉球における茶の栽培は、『琉球国由来記』によれば1623年（天啓3）に金武王子朝貞が茶の種子を薩摩から持ち帰り、金武間切漢那村（現在の宜野座村漢那）に栽植したことに始まるという。栽植がおこなわれた場所は、福地川沿いにあったと伝えられている⁴⁾。また『球陽』には、向秀美（知名筑登之親雲上朝宣）が1731年（雍正9）中国福州に渡り製茶法を学び、帰国して西原間切棚原村（現在の西原町字棚原）にて茶樹を栽植し、国用に供したという記録がある。これらが沖縄における茶栽培に関する最古の記録であるが、その後の茶栽培についての詳しい消息は不明である⁵⁾。しかし、日本本土及び台湾からの茶の導入が幾度か試みられており、明治期に至るまで連綿と茶の栽培は続けられていたものと思われる⁶⁾。

一方、これと同時期の18-19世紀には、琉球国に大量の中国産の茶葉が流入していた。清朝への朝貢貿易の際、福州から帰帆する進貢船が茶葉を持ち帰ったものであり⁷⁾、この貿易を通じてもたらされた中国



写真1 「沖縄県茶発祥之地」碑



写真2 漢那ダム湖

- 4) 当該地は、現在は漢那ダム湖の底に沈んでおり、ダム湖の公園に沖縄茶業発祥の地を顕彰する碑が建てられている。【写真1】【写真2】参照。なお、本調査の時点（2009年8月）では漢那地域において茶栽培は既に行われていなかった。
- 5) また、17世紀には本島のみならず久米島においても茶の栽培が開始されていた。久米島の茶園は上江洲家によって1673年（康熙12）に造成され、1726年（雍正4）には当地で製造された茶が王府御書院に献上されているが、明治期以降久米島における茶栽培は衰退した。今回の調査では上江洲家伝来の茶器を実見することができたが、かつての茶園の所在地は不明とのことであった。久米島の茶栽培の歴史については上江洲均「久米島の茶の話」（『久米島の民族文化——沖縄民族誌Ⅱ——』榕樹書林、2007年2月、132-140頁）参照。
- 6) 松下智『日本名茶紀行』雄山閣出版、1991年8月、49-50頁参照。
- 7) 松浦章「清代中琉貿易による中国茶葉の琉球流入」『清代中国琉球貿易史の研究』、榕樹書林、2003年10月、225-238頁参照。同論文には、福州から琉球に輸出された茶種が、烏龍茶に代表される半発酵茶であり、かつこれに強く花の香りをつけた茶として「香片」（さんびん茶の由来）の名が1920年発行の『支那省別全誌第十四巻 福建省』の記事中にみえることも指摘されている。

茶が、琉球国における消費茶葉の主流をなしていたことは疑いない。すなわち、現代にいたるまで続く、沖縄における中国茶飲用の文化はこの時期に既に形成されていたと考えられる。

3 明治・大正期

明治期に入っても、沖縄における茶の生産はあまり向上しなかった。例えば1894（明治27）年に沖縄で開催された「九州沖縄共進会」に出品された沖縄産茶に対しては、栽培製法が幼稚であって一見紅茶のように見え、茶滓を審査して初めてその緑茶であることが知られたこと、「支那黄茶の製法」に似ていて不良、といった批評がされていた。しかしまた、当時より特に本島北部の国頭地方が茶樹の生育に適していることが評価されており、栽培製法の技術を改善すれば向上するだろうと述べられている。また、沖縄地方は茶の消費量が多く、大量の茶を周辺地域から輸入しているが、これを防ぐためにも茶業を振興すべきであるという指摘もこの時期から既になされている⁸⁾。

大正期において、茶の産出量は次第に増加してはいたが、自給率をあげるまでにはとても至らず、1923（大正12）年の時点で茶の自給率は僅か0.06パーセントに過ぎなかった。他方、日本茶・中国茶・台湾茶の輸入額は八十万円を突破するほどであり、ここに至って茶業の奨励がようやくおこなわれた。中国茶が琉球＝沖縄の社会に深く浸透し、日本茶が流入した後も福州産の茶が好んで輸入され飲まれ続けてきたことは、明治から昭和の初期にかけても同様であった⁹⁾。

4 昭和戦前期

1932（昭和7）年1月に「茶業奨励規定」が制定され、茶業改良奨励のため補助金が交付されたこともあって、茶の生産高が急激に増加することとなった。この茶業奨励は、茶を自給作物として取り上げ、不況の打開策として強力に推し進められたものであった。その後も沖縄茶の自給自足をはかるべく、1940（昭和15）年頃までは積極的に茶業が奨励され、結果として茶の生産高は順調に伸びていった。1927（昭和2）年に約40haであった沖縄の茶園面積は1932（昭和7）年には約109ha、1937（昭和12）年には約352haへと急速に増加している。

当時の中国茶のおもな輸入元は台湾であった¹⁰⁾。これはむろん日本による台湾統治の影響を受けてのことだと考えられるが、戦後はまた中国からの輸入が増加してきたという。

5 琉球政府期

戦前期に増加した茶生産は、戦争の勃発にともない奨励作物が食糧作物へ転換したことから衰退し始

8) 明治27年農商務大臣官房博覧会「府県連合共進会審査復命書」（『沖縄茶業誌』1-2頁参照。）

9) 松浦氏前掲論文、225-226、229-231頁。明治期から昭和初期にかけて、『大阪毎日新聞』鹿児島・沖縄版や『通商彙纂』の記事中で、たびたび沖縄における中国茶への嗜好性と本土産緑茶の需要の伸びのなさが話題となっていたことが指摘されている。

10) 日本統治時代の台湾においても茶葉生産と輸出は重要な地位を占めており、特に半発酵茶である烏龍茶と包種茶が海外へ輸出された。現在沖縄で販売されているさんぴん茶の中には商品の名称として「包種茶」をあげるものもあり、台湾産包種茶との関連もうかがえる。

め、太平洋戦争の戦禍によりほとんどの茶園・製茶工場は破壊・焼失した。戦後の1948（昭和23）年頃から茶業復興の機運が高まり、また茶業振興策が実施されることとなった。1950（昭和25）年の栽培面積は98ha、生産高は49トンであったが、1956（昭和31）年には栽培面積169ha、生産高は84トンでピークを迎えその後は下降した。1967（昭和42）年には栽培面積は68haであったが、生産高は155トンと面積当たりの収穫量は大幅に増加している¹¹⁾。

茶の輸入については、1954（昭和29）年に編まれた『沖縄茶業調査報告書』によれば、1951（昭和26）年度の輸入茶の数量は434トン、日本と台湾からの輸入が99.5パーセントを占めていた。また同報告書では、沖縄の茶業が良好な環境に恵まれているにもかかわらず発展しない理由をいくつかあげているが、その中に島内産茶より日本茶が安く、しかも島内産は生産量が少ないので、商人は日本茶を取り扱うほうが利益がある、ということが述べられている¹²⁾。

このような状況を鑑みて島内産茶の保護をはかるため、1966（昭和41）年には茶の輸入数量の規制が実施された。翌年にはさらに規制が強化され、島内産茶の優先販売策がとられた。また、半恒久的施策として島内産茶の販売実績にもとづいて輸入量が各業者に割り当てられることとなり、琉球政府による「沖縄茶業振興計画」ともあいまって生産の拡大がみられた。1970年には茶の自給率も20パーセントにまで上昇している。

6 本土復帰後

1976年、「ゆたかみどり」「やぶきた」「あさつゆ」「さやまみどり」が茶の奨励品種に決定された。これらは早い時期に収穫できるため、早摘み茶として本土への出荷が定着した。本土復帰後は1980年頃を境として減産傾向が続くようになった。ここでもやはり、茶生産の伸び悩みの原因として、県民の茶に対する嗜好性の問題や外国産茶との競合があげられている。

三 沖縄茶業の現況

1 生産・移出

沖縄における製茶業は、現在は栽培面積が減少傾向にある。1975年に109haあった茶園が2002年には51haと半減しており¹³⁾、さらに2007年は42haへと減少している¹⁴⁾。また、茶園のある地域そのものも減少しており、茶業組合が近年活動を停止した地域も少なくない。現在沖縄本島内で茶樹の栽培がなされているのは国頭郡奥・大宜味村・東村・金武町・うるま市・名護市であり、このうち今回の調査では奥・

11) 『沖縄統計年鑑』1969年6月、164頁参照。なお1967（昭和42）年の栽培面積68haのうち、本島北部に53ha、中部に13haの茶園があった。

12) 上野健二述『沖縄茶業調査報告書』1954年（『沖縄茶業誌』8-9頁参照。）

13) 武田善行・田中淳一・中原正實・波名城晋「沖縄県の台湾導入実生茶樹群の収集」（『植物資源探索導入調査報告書』第19巻、2003年3月、47-51頁）、48頁参照。

14) 内閣府沖縄総合事務局『沖縄農林水産統計年報』による。なお同統計によれば、1974年の茶栽培農家数は286戸、2004年では47戸である。

うるま市・名護市の茶園を訪問した。厳しい状況下ではあるが、訪問先ではそれぞれ現在の栽培状況や新たな取り組みについての話をうかがうことができた。本節では、そういった沖縄の茶栽培をめぐる新たな動きについてふれておきたい。

近年、沖縄における茶の栽培地として最も有名なのは、本島の北端、国頭郡奥地区であろう。「おくみどり」に代表される奥の茶が全国に名を知られるようになったのは、日本一早い茶摘みの時期によってである。本土より一月以上早く新茶が摘めるという気候上の特色を生かし、奥の一番茶は半分以上が静岡へ移出されている。県内へ出荷されるのは二番茶以降である。また、奥の共同店では一番茶以降の新茶の他にも、地元の人が好んで飲む安価な「くき茶」なども販売されていた。



写真3 奥地区の製茶工場



写真4 奥共同店

茶の栽培品種の変化もまた、近年の新たな動きのひとつである。従来、沖縄における茶の栽培種は本土から持ち込まれた奨励品種である「ゆたかみどり」や「やぶきた」等がその多くを占めていた¹⁵⁾。しかし最近では、独特の香りがあり紅茶の製造にも向く「印雑131」や、半発酵茶・紅茶用に開発された「べにふうき」も注目されている¹⁶⁾。ただし「べにふうき」は紅茶としてではなく、花粉症・アレルギーに効果があるとされるメチル化カテキンを多く含むところから、健康食品として利用され非常に人気が高い。単に飲料・嗜好品として消費される茶だけでなく、健康に積極的に作用する食品としての茶の生産という、新たな局面が期待される。

紅茶の生産も、近年注目されており、徐々に沖縄に根付きつつある。沖縄の気候・風土が紅茶葉の栽培に適していることはかなり以前から指摘されていたが、実際に沖縄の紅茶が商品化されたのはごく最近のことである。うるま市山城地区の沖縄紅茶農園では、無農薬の手摘み紅茶を生産・販売しているが、そのみならず茶園を中心とした観光農園への発展をはかるなど、新しい展開への模索がなされている。

15) 本土では「やぶきた」茶が約7割を占めているが、栽培条件の関係上、沖縄においては「ゆたかみどり」の割合が最も高い。

16) 「べにふうき」は現在、気候条件などから鹿児島県を中心として栽培されている。発酵して紅茶にするとメチル化カテキンが消失するため、緑茶として用いられる。

明治期から現在に至るまで、沖縄各地の農学校・農事試験場・農業試験場において茶栽培に関する様々な試験研究が実施されてきた。土壌別の茶樹の育成試験や製茶試験・栽培環境の改善試験等、沖縄における茶業の改善及び向上を目的とした研究が現在もなされている。



写真5 山城地区の山間にひらかれた沖縄紅茶農園



写真6 沖縄農業試験場名護支部の茶園

2 流通・消費

本節は、沖縄における茶の消費・流通の現況を、聞き取り調査の結果に基づいて茶種ごとにまとめたものである。なお、一章でふれたように、2008年11月における調査は那覇・首里周辺の小売の茶舗を中心に起こない、終戦後から現在にいたるまでの販売茶種の変遷・茶葉の仕入れ先等についてを主な調査対象としたが、今回の調査では茶生産者への聞き取りを主としたためこの項目への追加情報はあまりなかった。したがって、本節の記述は、先の報告における「a. 沖縄における茶の消費・流通・生産の現況」に多く依拠している¹⁷⁾。

a. さんぴん茶（中国茶）

琉球王朝時代から広く飲用されてきたさんぴん茶は、今なお茶舗においても主力商品として安価なものから比較的高価なものまで豊富な銘柄の茶葉がおかれている。また、どこでも手軽に入手できるペットボトル入りの飲料としても100種類以上が販売され、名実ともに沖縄の茶文化を代表する茶であるといえるだろう。

現在、さんぴん茶として販売されている商品には名称や原材料名に「茉莉花茶」または「ジャスミン茶」と表示されていることから明らかなように、さんぴん茶は半発酵茶に茉莉花（ジャスミン）の香りをつけた茉莉花茶の沖縄における呼称である¹⁸⁾。さんぴん茶の名の由来は中国から輸入された香片（xiang

17) 大槻・岡本・宮嶋前掲論文、304-306頁。本節の内容の詳細についてはこちらを参照されたい。

18) 現在、一般に「ジャスミン茶」といえば、中国の北部でよく飲まれている、緑茶にジャスミンの香りをつけた茶をさす。さんぴん茶は半発酵茶（烏龍茶の類）にジャスミンの香りをつけたものであり、いわゆる「ジャスミン茶」とは茶葉が異なる。

pian) 茶, すなわち茉莉花茶の別称がなまったものとされ, 当時と同じく, 現在でもさんぴん茶は中国福建省及び台湾北部で生産・輸入されており¹⁹⁾, 沖縄県内での生産はおこなわれていない²⁰⁾。

b. 緑茶類

1972年の本土復帰後, 日本本土産の緑茶が沖縄に流入し, 次第に受容が拡大された。各茶舗でも本土産の煎茶や番茶, 抹茶などが販売されており, 緑茶類が一定の地位を占めていることがわかる。その主な仕入れ先は京都や静岡・鹿児島などで, 地理的な条件もあってとりわけ鹿児島からの移入が最も多い。県内生産茶（本島北部で採れる茶は, 地域の名称をとって「やんばる茶」とも呼ばれる）もむろん緑茶であるが, 一番茶は県外移出用であり, 全体的な生産量も少ないところから, 本島南部には流通せず, 那覇市内の茶舗ではまったくといっていいほど販売されていなかった。県内生産茶は県外への移出用・土産物用であるとの認識が一般的であり, 現状では特に本島南部の茶文化にはそれほど深い関わりを持っていない²¹⁾と思われる。

現在の沖縄では, コンビニや自動販売機でのさんぴん茶のペットボトル販売の影響もあってか, 沖縄の茶文化における主流がさんぴん茶であるとの印象を受ける。しかし, 地元の方の話によればさんぴん茶は近年再び注目されて復権したものであるともいい, 現在は本土復帰後拡大の一途をたどった緑茶の流入と受容が落ちつき, 従来のさんぴん茶を中心とする文化との共存がはかられつつある状況であるとも考えられる。

なお, 緑茶と同様に本土から移入された麦茶なども販売されているが, その需要は少ないようである。

c. 健康茶・薬用茶

近年は, 茶葉でなく沖縄の特産品を用いた健康茶や薬用茶の販売も非常に盛んである。元来薬用茶は沖縄の一般家庭で自家製の飲料として広く飲まれていたものの商品化であり, さんぴん茶のみならず, 伝統的な沖縄の飲料文化が再評価され内外の注目を集めているようである。調査中に茶舗や土産物屋で見かけたものだけでも「うちん茶」「グァバ茶」「ハイビスカスティー」「ゴーヤー茶」など様々な商品があり, また久米島でも「シモン茶」や「レモンガラスティー」が販売されていた。本島中部以北の道の駅などではまた別の健康茶, 「さとうきび茶」や「オオバコ茶」といった商品が見られた。未見分も含め, 現在かなりの種類の健康茶・薬用茶が沖縄全域で販売されていると思われるが, これらはいずれも観光客をメインターゲットとしたものであるという²²⁾。

19) 沖縄県統計年鑑（2008年）によれば, 2006年の茶の輸入額は118,620,000円, 2007年は118,009,000円である。輸出入額に関するデータは不明であり, 額はかなり低いものと思われる。

20) さんぴん茶の他にも, 清明（シーミー）茶と呼ばれる茶がある。王国期の記録ではよく見られる名称で, 戦前の沖縄ではさんぴん茶よりもよく飲まれたともいわれるが, 戦後は安価なさんぴん茶に押されたため次第に飲まれなくなった。現在ではあまり見かけないが, さんぴん茶と同じ茉莉花茶の一種である。さんぴん茶に比べると発酵の度合いが大きく, より甘みがあり, 後味がすっきりしている。やはり福建あるいは台湾から輸入されるという。

21) やんばる茶の二番茶以降は, 本島中部まではある程度出荷されており, 土産センターでも販売が確認できた。

22) 沖縄の薬草産業については, 比嘉堅『沖縄のアグリビジネスと産業組織——21世紀沖縄農業の新たな展開と方向——』

おわりに

本稿では、2008年11月及び2009年8月に実施した「沖縄における茶文化調査」と関連資料をもとに、近代以降現在に至るまでの沖縄の茶文化史の概要を、茶の域内生産・製造、流通・消費の面から述べてきた。

既に先の報告から繰り返し触れてきたように、沖縄における茶文化の最大の特徴は、生産・製造、流通・消費という二つの側面が、それぞれある程度独立した歴史を構築してきたことにある。琉球王朝時代から近現代を通じて、常にこの地域で消費される茶の大部分は中国・台湾・日本の周辺諸地域から移入されたものであり、域内生産茶の占める割合はさほど高くはなかった。他方、茶の域内生産についても17世紀以降様々な努力が重ねられて継続発展しており、とくに近年は移出用・土産物用として消費の場が外部に求められている。いわゆる自給自足といった観念とは異なり、むしろ生産と消費の対象が互いに乖離し、いずれの活動も外部地域との関わりが成立に必要な不可欠であると言える。

このような状況は一見非常に不安定であり、実際に茶の自給率を増加させるにあたっての問題点としてしばしば指摘されてきたことは本論でも既に紹介した。また、域内生産茶の販売量を増やす直接的な手段として、琉球政府時代には台湾茶の輸入制限がかけられたこともあった。域内生産茶の域内需要・消費量を上昇させることは、むしろ、現代の茶生産者にとっても、いまだ根本的な解決がなされていない重要で切実な課題である。

しかし、これを阻害する最も大きな理由として人びとの嗜好性の問題、すなわち文化的な背景が夙に指摘されてきたことは非常に興味深い。先の報告で筆者らは、琉球＝沖縄の茶文化の展開とその形態が、「周縁」における文化のあり方を考えるひとつの指標となるのではないかと考えた。琉球王朝時代から現代にいたるまで、周囲の情勢・時代の極度な変化を越えてなお、特異な形態を強固に保持し続けている琉球＝沖縄の茶文化は、まさに琉球＝沖縄の文化的伝統そのものの象徴であるとも言えるだろう。

本調査及び報告書の執筆にあたり、多くの方々より様々なご教示・ご協力をいただきました。ここに記して心より感謝の意を表します。(順不同)

糸満盛也氏（沖縄県茶生産協議会会長・奥共同店主任）

比嘉猛氏（金川製茶／沖縄県名護市）

平松紀士氏（沖縄県農業研究センター名護支所）

山城直人氏（農業生産法人株式会社沖縄紅茶農園／沖縄県うるま市）

（東洋企画，2003年6月）の第四章 薬草産業を参照。